

## 第一編

### 序章 有時の時間論は難解である

有時の巻は、道元の著書『正法眼蔵』七十五巻の中で難解とされる。なぜ有時の時間論は凡夫にとって理解が困難なのであろうか。解りやすく説明すれば、凡夫と覚者の時空論の違いである。ここが重要な点であることに間違いない。凡夫は時空世界の中で生命活動し、微細な生命体であると認識し、信じている。覚者は自己当体が宇宙其の物であり、自己が時間であり空間である。自己の存在によって、時空世界が成立すると説くのである。難解な有時の時間論を理解するための重要な鍵となる。

私達凡夫は、絶対空間と絶対時間の世界で日常生活をしている。絶対空間とは三次元(縦・横・高さ)の東西南北前後左右と、一次元(直線時間)の過去→現在→未来へ直線的に進行する時間(不逆転)とともに、生命が存在する。四季の春夏秋冬の時間も、時計の時間の進行も、自己の生から死への時間の進行も、全てが三次元空間世界と一次元直線時間界内の森羅万象の生滅とともに存在するものと信じている。

道元の有時の時間論は、現代的に説明すれば、四次元的時空論(自己即時間即空間・相対性理論)である。禅師は有時の巻の中で「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」と説かれている。時間即存在であり、存在即時間であることを明述されている。私自身は四次元時空論と覚者の時間論と同意であるとは考えてはいない。ただ、凡夫の時空観と道元の時間論の差異を明確に認識するための事例として挙げたのである。差異が明確になることによって、難解な有時の時間論を理解するための一歩と考えるからである。

有時の巻で、道元が明らかにする時間論の世界は、凡夫から見ると三次元の時空世界ではなく、四次元的な自己即時間即空間が一体となった、当に仏から観る宗教的時間の世界なのである。